

A・マチャードの二つの《アルバルゴンサレスの土地》 —— 短篇小説と長篇詩における作中人物の比較 ——

竹 村 文 彦

はじめに

1907年以來、スペイン北方の小都市ソリアに住んでいた詩人のアントニオ・マチャード(1875-1939)は、1910年の9月に何人かの友人を伴ってドゥエロ川の水源を訪ねる小旅行に出かける。ウルビオン山の山頂まで登り、下山する途中で〈黒い湖〉に立ち寄っているが、そのときの体験を生かしてまず執筆するのが、《アルバルゴンサレスの土地 La tierra de Alvargonzález》という短篇小説である。これは詩壇の重鎮ルベン・ダリーオが編集長を務める雑誌『世界マガジン』*Mundial Magazine*の第9号(パリ、1912年1月刊)に掲載された¹⁾。この散文作品では、嫉妬と強欲に駆られた二人の兄弟が実の父親と末の弟を殺害するという陰惨な話が、ある農民の口を通じて「私」に語られる。マチャードがこの話を実際に誰かから聞いたのか否かは定かではなく、何人かの研究者はこれを詩人の完全な創作だと考えている(Terry 1973: 43. Sánchez Barbudo 1981: 211)。次いで詩人は、同様の内容の話を韻文の長篇詩に仕立てて同じ《アルバルゴンサレスの土地》という題名を付し、雑誌『読書』*La Lectura*の第136号(マドリード、1912年4月刊)に発表、さらにこれに加筆修正を施して決定版とし、第三詩集『カステイーリャの野』*Campos de Castilla*(1912)に収録した(全集中の通し番号は、CXIV番)。長篇詩では、農民が「私」に語った話という設定がなくなり、また二人の兄弟に殺害される人物が父親だけになっている。

全712行の詩句からなるこの作品(決定版)は、マチャードが生涯に発表した中で最も長大な詩であり、詩集中でも最も野心的な作である(Terry 1973: 42)。ロマンセ(romance)と呼ばれる詩型(任意の数の8音節詩句を連ね、偶数行で類音韻を踏む)で書かれているが、これは中世期にイベリア半島で生まれて以来、民衆的な性格の物語詩に主に用いられてきた長い伝統を有する詩型である。『作品集』*Páginas escogidas*(1917)の有名な序文で、マチャードはこの作品を書いた意図を明らかにしている。それによれば、「詩人の使命は、人間にまつわる永遠のものから新たな詩を創出すること、詩人のものであるにもかかわらず、それ自体でも自律して生きているような活気ある物語を創出することだ、と私は考えた。ロマンセが詩の至高の表現のように思え、私は新たなロマンセ集を書こ

うとした。この目的に対応するのが《アルバルゴンサレスの土地》である」。第二詩集『孤独、地下道、その他の詩』*Soledades. Galerías. Otros poemas* (1907) までの詩人の歩みからすると、「人間にまつわる永遠のもの」から「活気ある物語を創出する」という志向は、大きな方向転換を意味している。なぜなら、象徴主義の影響下にあった第二詩集までの詩人は、挿話的なものを詩から極力排除してみずからの情感を表白することに力を注いできたからだ。『カスティーリャの野』はこのような極度の主観性や内面性への反動を出発点としており、ここで詩人は外の世界を注視し、人々や風景や社会を客観的に描き出そうとする。詩集中のどの作品よりも物語性の強い《アルバルゴンサレスの土地》(以下、《土地》と略記)は、そうした試みの最たるものであった。

同じ序文でマチャードは続けて、しかし自分が企てるのは昔のロマンセを模倣し、復興させることではないと確言する。「私のロマンセは英雄的武勲詩から発するのではなく、武勲詩をこしらえた民衆や武勲詩が歌われた土地から発する。私のロマンセが目を向けるのは、人間に関する基本的なもの、カスティーリャの野、そして創世記と呼ばれるモーセの第一の書である」(Machado 1989: 1594)²⁾。詩人は大昔の英雄の手柄ではなく、同時代に生きる民衆の関心事を歌おうとする。そこで彼のロマンセは、文学的な質を度外視すれば、盲人たちが残酷な犯罪の顛末を広場や辻で物語った〈盲人のロマンセ〉に近づくことになる。短篇小説《土地》の語り手の農民も、本題に入る前にこう言っていた。「私は子供のころ、ある羊飼いがアルバルゴンサレスの物語を語るのを聞きましたし、それが紙に印刷されて出回り、ベルランガの地では盲人たちによって歌われていることも知っています」(párr. 16)。ロマン派の詩人・劇作家のリバス公爵(1791-1865)からガルシア・ロルカ(1898-1936)に至るまで、ロマンセという詩型に新風を吹き込んだ詩人は何人もいるが、長篇詩《土地》によってマチャードは、そうした系譜の中で確固とした地歩を占めている(Sesé 1980: 311)。

先の引用の最後で創世記の名前が挙がるが、そこで意識されているのはカインとアベルの物語である。嫉妬に起因する憎悪ゆえに肉親を殺す《土地》の兄弟、その原型はここにあったのだ。マチャードの詩にカインの姿が見え隠れするのは、本作品が初めてではない。小学校の授業風景を回想した第二詩集所収の《子供の頃の思い出 *Recuerdo infantil*》(V)では、教室の壁の「貼り紙には／逃げるカインと／死んだアベルが／深紅の染みの隣に描かれている」(vv. 5-8)。『カスティーリャの野』に取められた《スペインの土地をめぐって *Por tierras de España*》(XCIX)は、「羨望や悲しみで常に目が濁った」(v. 21) 田舎の人の姿を捉えるが、彼の暮らす荒れ野を横切るのは「さまようカインの影」(v. 32) である。さらに、同じ詩集中の《犯罪者 *Un criminal*》(CVIII)は、神学校の勉強に嫌気がさして女に入れあげ、手っ取り早く遺産を相続するために両親を斧で殺した凶悪犯の裁判の様態を扱う。思想家ミゲル・デ・ウナムーノの小説『アベル・サンチェス』*Abel Sánchez* (1917) に典型的に見られるように、カイン的な人物は当時の他の作家たちも好んで取り

上げていた (Fernández Ferrer 1982: 52. Barbagallo 2012: 88)。

本稿では、短篇小説と長篇詩の二様の形態で綴られた《土地》を比較して、これまであまり強調されてこなかった双方の違いを指摘し、最後にそうした違いがどこから生じたのかを考察したい。それに先立って《土地》の内容を紹介し、二つの作品を比較した先行研究を検討する。

I 《アルバルゴンサレスの土地》の内容

長篇詩の《土地》は全体が10の部に分けられ、おのおのの部がさらにローマ数字でいくつかに下位区分されている。10の部には、最初のひとつを除いてそれぞれ表題がついている。本節ではまず、長篇詩の内容を部ごとにまとめ、続いて短篇小説がこれとどんな点で異なるのかを指摘しておく。

ソリアの田舎に住むアルバルゴンサレスはかなり裕福な地主で、人々の語り草になるような立派な結婚式を挙げて妻をめとり、三人の子供に恵まれる。長男のファンを農業に、次男のマルティンを牧畜業に従事させ、末子のミゲルには聖職者の道を歩ませる。上の二人の息子は結婚するが、アルバルゴンサレスの財産を狙う強欲な義理の娘たちは一家に不和をもたらす。勉学よりも若い女性を好んだ末子は、聖職者を目指すのをやめ、新大陸へ旅立つ。アルバルゴンサレスは秋のある日、ひとりで外出し、泉のほとりで眠り込む (vv. 1-60)。

アルバルゴンサレスは、息子たちがまだ幼い頃のことを夢に見る。夢の中で、長男と次男は薪たきぎに火を点けようとしてうまく行かず、末の息子はそれに成功する。父親が末子を抱き上げ、「お前が私の一番のお気に入りだ」と告げると、上の二人の子供はその場から立ち去る（「夢」 vv. 61-104）。

話は現実の世界に戻り、長男と次男は泉のほとりで眠っている父親を見つけて刺し殺し、死体を〈黒い湖〉まで運んで沈める。この事件の犯人としてある行商人が逮捕されて死刑になる一方、アルバルゴンサレスの妻は心痛のあまり数ヵ月後に亡くなる（「あの日の午後……」 vv. 105-164）。

春が訪れ、花がふたたび咲いて木々に緑が戻る。家畜を買うために出かけた長男と次男は、森の中で殺人事件の真相を仄めかす唄を耳にする（唄は以降、少しずつ歌詞を替えながらくり返し歌われ、人々の間に広まることになる）。松の森が兄弟に恐ろしげな姿を見せ、二人は〈黒い湖〉に近寄るのを避ける（「また別の日々」 vv. 165-280）。

父親の土地は手に入ったものの、二人の兄弟が耕作に身を入れることはなく、天災なども災いして不作の年が続き、彼らの生活は貧窮する³⁾。ある冬の夜、消えかかった暖炉の火を見つめながら、長男は犯した罪を悔いる言葉を口にする（「罰」 vv. 281-330）。

雪の降りしきるまた別の冬の夜、アルバルゴンサレス家の戸口のノッカーが鳴らされ

る。新大陸で財をなした末弟のミゲルが帰郷したのだ。兄たちの容姿が醜いのに引き換え、ミゲルは端正な顔立ちで、背も高く体つきもがっしりしている。三人の兄弟が寒さに凍えていると、「死んだ父親の顔」(v. 402)をした男が薪を背負って入ってくる(「旅人」vv. 331-406)。

ミゲルが兄たちから農地の一部を買って懸命に耕作に励むと、農地は以前のように豊かな作物を実らせる(「新大陸帰りの男」vv. 407-448)。

アルバルゴンサレスの家の詳細な描写。ミゲルが今生活するのは、かつて両親が起居し、父親が家族に囲まれて幸せになれるものと信じた部屋である。秋を迎えた野辺の情景。「おお、スペインの心臓を占める／アルバルゴンサレスの土地よ、／貧しい土地、悲しい土地、／魂を持つほどに悲しい土地！」(vv. 563-566)という、この長篇詩でも最も名高い詩句はここに見出される。少し先には「おお、呪われた哀れな野、／私の祖国の哀れな野！」(vv. 575-576)とあり、描いている対象に感情移入した語り手(マチャード自身と重ねてもよいだろう)が思わず素顔を覗かせる(「家」vv. 449-576)。

ある秋の朝、長男のフアンは畑を耕して畝を作るが、作るそばから畝の溝はまた埋められるように見える。次男のマルティンが地面に鋤くわを入れると、鋤は血で赤く染まる。末子のミゲルは美しい妻をめとり、兄たちの財産をすべて買い取る(「土地」vv. 577-622)。

ある日、フアンとマルティンは夜明けとともに家を出て、ドゥエロ川の上流に向かう。前日の晩に、果樹園で父親に似た白髪の男が農作業をしているのを見た、とフアンは弟に告げる。日が暮れると、森は凶暴な姿を示して二人を取り囲む。〈黒い湖〉に着いた二人は、「父さん！」と叫びながら湖の底に姿を消す(「殺人犯」vv. 623-712)。

以上が長篇詩《土地》の内容である。短篇小説の内容でこれと異なるのは、主に以下のような点である。

第一に、短篇には本篇の物語の外枠ないし導入部となる、次のような別の挿話が付随している。ドゥエロ川の水源地を訪ねることにした「私」は、10月の初めにソリアで乗合馬車に乗り込み、そこでひとりの農民と会話を交わす。向かう方向が同じだったので、馬車を降りたあとも馬に乗って一緒に旅を続けると、ある場所で相手はアルバルゴンサレスの土地を示し、そこはかつて周辺一帯で一番の農地であったと語る。そして子供のころに羊飼いから聞いた話だと言って語り出すのが、本篇の物語なのだ。

第二に、泉のほとりで眠ったとき、短篇小説ではアルバルゴンサレスはいくつもの夢を見る。まず、子供の時分に両親や兄弟と暖炉の火を囲んでいる夢、次いで青年時代に妻の一家と野原でくつろいでいる夢、それからようやく点火をめぐる自分の三人息子の夢になる。眠りに落ちる前に彼が、多くの恵みを施してくれた神に感謝の祈りを捧げることや、語り手の農民が横道に逸れてさし挟んだ夢についての考察も長篇詩には出てこない。

第三に、長篇詩の「また別の日々」と「家」の部に対応する箇所は短篇小説にはわず

かしかなく、また「罰」の部で、長男が自分の行いを悔いる場面も短篇には存在しない。

第四に、「旅人」の部で一家に薪を届けてくれる父親の顔をした人物は、短篇小説では雪の中を遠ざかる後ろ姿しか見せない。また、「殺人犯」の部で長男が言及する、果樹園で農作業をする人物は、短篇小説では酒に酔った長男と次男の二人によって目撃される。

第五に、これが両作品の筋書き上の最も大きな違いであるが、短篇小説では長男と次男は父親を殺すだけでなく、羨望と憎悪から末弟のミゲルをも殺害する。

II 先行研究の検討

散文と韻文による二つの《土地》の比較は、さまざまな論考の中で散発的・断片的な形で行われているが、このテーマを中心に据えて本格的に論じているのはアラン・W・フィリップスである (Phillips 1955)。そこでここでは、フィリップスの主要な論点を紹介し、必要に応じて他の研究者の考察にも言及する。フィリップスは基本的に、短篇小説と長篇詩はおのおののジャンルの特質や制約に応じる形で書き分けられていると考える。「もし散文が、より概念的な目的を果たすために論理的・物語的な枠組みの中で事実——それがいかに幻想的なものであれ——を提示するとしたら、韻文の方は明快で正確な説明をするよう義務づけられてはいない。抒情詩の有効性はむしろ茫漠としたもの、仄めかされたもの、神秘的なものの方に存する」(Phillips 1955: 134)。前述のように短篇小説には枠となる挿話があり、アルバルゴンサレス家の悲劇はある農民の口から「私」に向けて語られる。そうした外枠が設定されるのも、論理性が求められる散文においては、本篇をなす物語を時間上・空間上に正確に位置づける必要があるからだという。

これも前に触れたが、長篇詩で殺害されるのは父親だけで、末弟のミゲルは広大な土地と美しい妻を得て幸福を享受して結末を迎える。もし長篇詩で弟までも殺されていたら、物語の焦点がぼけてしまったであろう、とフィリップスは言う。「父親のアルバルゴンサレスないしその影が、常に物語を支配している。父を殺したというだけの理由で、息子たちは罪からの救済を求める。こうして一度限りの殺人の残虐性は際立ち、同時に、最終的な罪の償いへと導く悔恨の情や絶望は強調される」(Phillips 1955: 131)。一方、短篇小説の読者は、登場人物についての納得のゆく説明を期待する。「マチャードは、ミゲルの運命をはっきりと決めなければならない。かくて短篇小説家にしばしば求められるより明快な構造に従って、彼は未解決の問題を残さずに、何が起きたのかを正確に述べることを余儀なくされる」(Phillips 1955: 131–132)。

次に、細部にわたる情報が詳しく書き込まれているのは短篇小説の方である。読者は短篇で、たとえばアルバルゴンサレスの妻の姓名を教えられ、彼のより完全な財産目録を示されることになる。対して長篇詩では、「詩のもつ自由さを活用するアントニオ・マチャードは、抒情性やドラマ性を生むという本質的な目的に対応していない限り、細部

にはそれほど立ち止まらない」(Phillips 1955: 132)。アルバルゴンサレスが見る予言的な夢に着目すると、眠りに落ちてすぐ彼は創世記の「ヤコブのように、／地上から天まで伸びる／階段を目にした」(vv. 61-63)。散文ではここですかさず、「これは楡にれの樹の枝の間を通り抜けた日光の帯だったのかも知れません」(párr. 31)という注釈が入り、夢の情景の合理的な説明が図られる。続いて夢に関する哲学的省察がさし挟まれ、夢の描写も当人の幼年期や青年期の一場面にまで及ぶが、長篇詩ではそうした要素は捨象され、夢から覚めた直後に現実の世界で起こる犯罪の遠因となった挿話、点火をめぐる挿話だけに関心を集中させる⁴⁾。不可思議な現象の合理化を図る傾向について言えば、短篇小説では結末近くで、長男と次男が夜中に末弟ミゲルの果樹園で農作業をする亡父の姿を目撃するが、そこでも語り手はこう言い添える。「二人の啞然とした酔漢は、畑仕事をする人の姿が光の輪で囲まれていたように見えたのを、酒を飲んで頭が混乱していたからだと考えました」(párr. 89)。フィリップスの言葉を借りれば、「韻文は超自然的なものを強調し、散文は自然なものを強調する」(Phillips 1955: 132)ということになる。

次いでフィリップスは両作品のテキストを何箇所も突き合わせ、双方の文体上の違いをより具体的に示す。たとえば、殺害されることになる日のアルバルゴンサレスの外出は、短篇小説では次のように語られる。

ある秋の朝、彼はひとりで家を出ました。他の日のように痩せたグレーハウンド犬たちを供にしてもいなければ、背中に斜めに猟銃をかけてもいませんでした。猟師の道具も携えず、狩をするつもりもありません。川べりの黄色くなったポプラ並木の下を長いこと歩き、檜かしの森を横切り、巨大な楡にれの樹が日陰をつくっている泉のほとりで疲れを感じて立ち止まりました。額の汗をぬぐい、二口、三口水を飲むと、地面に横になりました (párr. 27)。

ここには「細部の積み重ね」があり、「舞台、意図、実際的な行為など、一切がくっきりとして正確な輪郭を持つ」(Phillips 1955: 136)。一方、同じ箇所は長篇詩ではこうなっている。

ある秋の朝、
彼はひとりで家を出た。
すばしこい猟犬の
ハウンドたちを連れてはいなかった。
悲しみと物思いに沈んで、
黄金のポプラ並木を歩き、
長い道のりを歩いて

Una mañana de otoño
salió solo de su casa;
no llevaba sus lebreles,
agudos canes de caza;
iba triste y pensativo
por la alameda dorada;
anduvo largo camino

澄んだ泉に着いた。

そして地面に寝そべった (vv. 50-57)。

y llegó a una fuente clara.

Echóse en la tierra; [...]

こちらでは、「猟銃」や「猟師の道具」、「樫の森」は姿を消して「ハウンドたち」と「黄金のポプラ並木」に集約され、代わりに「悲しみと物思いに沈んで」という語句が加わってアルバルゴンサレスの心の内が明かされる。そしてこの「苦悩の色調」の方が、「出立の客観的な語り以上に関心を引く」(Phillips 1955: 136)。

フィリップスからは離れるが、ここでもう一箇所、短篇小説と長篇詩のテキストを照合し、両者の違いを確認しておこう。アルバルゴンサレスの夢の中でのこと、長男と次男が火を起こすのに失敗したのち末子はそれに成功する。父親は手放しで末子を褒め、末子への偏愛を隠そうともしない。すると羨望に駆られた兄たちは、短篇小説にしたがえば、「死のように青ざめて、夢の片隅に遠ざかりました。長男の右手には鉄の斧が輝いていました」(párr. 48)。兄弟は火を起こすのを試みる前に、山に薪^{たきぎ}を取りに行っているので、長男が斧を持っていること自体は少しも不思議ではない。ただ、右手に握られた斧は直後に現実の世界で起こる凶行を強く示唆するし、「死のように青ざめて」という言い回しもいささか大仰で、必ずしも効果的ではない。この箇所は長篇詩では次のようである。

二人の兄たちは、
夢の片隅に遠ざかる。
逃げてゆく二人の間で、
鉄の斧が光る (vv. 101-104)。

Los dos mayores se alejan
por los rincones del sueño.
Entre los dos fugitivos
reluce un hacha de hierro.

鉄の斧は長男の右手ではなく、兄弟の「間に」ある。アントニオ・サンチェス・バルブードは、こちらの表現の方が「はるかに美しく、暗示的である」と評価する。「斧は——斧という着想は——二人の間にあり、二人を結びつける〔中略〕。夢を見ている父親が、以前は気づかなかったことに気づいて悟ったように、犯罪という着想は間違いなくそのとき生まれたのだ」(Sánchez Barbudo 1981: 218)。

ここまで見てきた先行研究の指摘をまとめると、短篇小説は詳細で具体的な描写や合理的な説明を特徴とし、長篇詩は切り詰められた表現の喚起力や幻想性を特徴とするということになるだろう。ジェフリー・リバンスも、短篇小説の方が「より現実主義的であり、巧緻さの点で劣る」と断じた上でこう述べる。「結局のところ、物語の方には叙述の朴訥さが欠けている——これはアーサー・テリーが『見事な簡潔さ』とか、『控え目な言い方の不気味な効果』とか呼ぶもの、詩作品の最良の瞬間を特徴づけるものだ」(Ribbans 1999: 55)。一方、ヘレン・F・グラントによれば、長篇詩と短篇小説の根本的な違

いは、前者では随所に唄と風景描写がさし挟まれるのに対し、後者には人間の本性をめぐる道徳的な考察が散見するという点にある (Grant 1953: 72)。

III 二つの《土地》の作中人物の比較

しかし散文と韻文で書かれた二つの《土地》の間には、先行研究が未だに十分注目していない相違点があるように思われる。それは両作品に登場する男女の人物像における相違である。具体的に言えば、短篇小説の作中人物たちが善人か悪人かではっきり二分され、極端に描かれているのに引きかえ、長篇詩ではそのような二分法が緩和されているのだ。以下では、このことを確認してみよう。

まず、一家の父親アルバルゴンサレスは、短篇小説では「あの土地の最も気高い心」という言い方で、その人柄を賛美されている。「なぜならアルバルゴンサレスは、自分の家で善良であっただけでなく、貧者の家でも深い慈悲の心を示したからです」。そこで、彼と付き合いのあった村人は、彼の死を「父親の死のように」(párr. 51) 嘆くことになる。語り手が彼のことを「よき父親」(párrs. 22, 51) とか、「よき農民」(párr. 55) と呼ぶのも不思議ではない。アルバルゴンサレスの風貌は、額に皺が寄り、ひげが銀色に輝いている点は短篇小説でも長篇詩でも同じなのだが、前者ではさらに次のような描写が追加される。「彼の肩はまだ逞しく、頭はそびえ立っており、こめかみのところだけが白くなっていました」(párr. 26)。明らかな老いの兆候は見られるものの、往年の頑強さや若々しさはまだ失われていない。父親の力強さに対する言及は、彼が殺害された後にもくり返される。殺人者の斧が叩き切ったのは、「寄る年波にも未だに屈することのなかった頑健な首」(párr. 51) である。こうした父親の優れた人間性や逞しさは、長篇詩ではことさらに述べ立てられてはいない。

「農夫の父から領主の／風采を受け継いだ息子」(vv. 379-380) と長篇詩で語られるように、アルバルゴンサレスの三人兄弟の中で、父親の人となりを受け継いでいるのは一番下のミゲルである (Sesé 1980: 314)⁵⁾。兄弟の中で、「ミゲルが一番容姿端麗である」(v. 384) というのは長篇詩でも短篇小説でも同様であるが、加えて後者ではミゲルの気前のよさが示されている。ミゲルは二人の兄から土地の一部を買い取るが、そのさい「土地の今までの最高価格をはるかに上回る金」(párr. 78) を二人に渡すのだ。

今度は、《土地》で否定的に扱われている作中人物に目を向けよう。一家に不和をもたらした長男と次女の妻たちは、短篇小説によれば「悪しき女たちで、自分の家のために欲の皮が張り、アルバルゴンサレスが死んだときに手に入る遺産のことばかり考えていました」(párr. 22)。妻たちの欲深さは、具体的な形で明確に述べられている。一方、長篇詩の該当箇所は、「畑地に対する強欲は、／死の向こうに遺産を見る」(vv. 33-34) となっている。妻たちの姿は、「強欲」という擬人化された抽象名詞の背後に消え、一般論

を語るような言い方である。首尾よく遺産は入ったものの、自身の怠慢や天罰ゆえに長男と次男の農地は荒れてゆく。短篇小説ではここで、「アルバルゴンサレス兄弟が貧すれば貧するほど、女たちの間のいさかみや恨みは高じてゆきました」と語られる。また、長男と次男の子供たちが幼くして死んでしまった理由に関しても、「なぜなら憎悪が母たちの母乳に毒を入れたからです」(párr. 60)と説明されるが、こうした言及は長篇詩には見られない⁶⁾。

アルバルゴンサレスの長男と次男は、短篇小説では父殺しという大罪を犯しても罪の意識や良心の呵責に苦しむことのほとんどない人物である。「アルバルゴンサレスの息子たちは、自分が何をしたのか分かっていないのです」(párr. 52)という語り手の言葉は、こうした自覚の欠如を裏づける。犯罪の翌年、豊作に恵まれると、「アルバルゴンサレスの息子たちは、犯罪の重圧をあまり感じなくなりました。というのも、悪党どもが罪の意識に苛まれるのは神様や人間の罰を恐れるときだけで、運命に助けられ、恐怖が遠ざかれば大喜びでパンを平らげるからです。まるで祝福されたパンであるかのように」(párr. 59)。引用の最初の一文にもかかわらず、二人の兄弟の罪悪感を窺わせるような挿話は実際のところ、物語の全体を通じてどこにも出てこない。

自分の悪行を悔い改めるような人間ではないからこそ、彼らは父を殺した後にも何度も重い犯罪をくり返す。アルバルゴンサレスが殺されると、あたり一帯を行商して歩いていた商人が容疑者として逮捕され、二ヶ月後には処刑される。「なぜなら、アルバルゴンサレスの息子たちが商人を警察に引き渡し、金で証人を雇って彼を破滅させるのに成功したからです」(párr. 55)。兄弟は自分たちの罪を赤の他人になすり付け、無実の人間を死へと追いやったのだ⁷⁾。弟のミゲルが新大陸から実家に戻ったとき、兄たちがまず目を留めたのは、「弟の胸で光り輝く金でできた太い鎖」(párr. 69)であった。そしてミゲルの畑に多くの作物が実ると、弟への憎しみと羨望を募らせる。やがて「犯罪の記憶が彼らを犯罪へと駆り立てて」(párr. 91)、水車用のため池でミゲルを溺死させるに至る。悔いる気持ちがないから、過去の犯罪は次の犯罪を抑止するどころか、むしろその引き金になる。「悪党たちは偽りの涙を流してこの死を嘆きましたが、それは誰からも好かれていないこの集落で疑いがかかるのを避けるためでした」(párr. 94)。

短篇小説の二人の兄弟は、遊興や酒に身を持ち崩す放蕩者でもある。ミゲルに土地の一部を買ってもらい金が入ると、二人はそれを「贅沢品や悪い遊びに見境もなく使ってしまった」(párr. 79)。そこで、ミゲルに残りの土地まで買ってもらうが、「兄たちは、馬鹿げたどんちゃん騒ぎにその金を浪費してしまい、賭け事と酒が二人をまたもや破産に導きました」(párr. 81)。ミゲルの果樹園で農作業をする亡父の姿を目撃したのも、「酔っ払って村に帰ってきたある夜」のことであった。「なぜなら二人は、近隣の祭りで酒を飲んだり大はしゃぎしたりして一日を過ごしたからです」(párr. 82)。その後も二人は行いを改めることなく、「金を浪費し続け、最後の硬貨まで失ってしまいました」

(párr. 90)。

長男と次女の邪悪さを間接的に際立たす印象的な場面がある。次の引用は、二人が父親を殺害してその死骸を〈黒い湖〉の底に沈め、村に戻ってくる途上を描くが、二人の出現は森の植物や水に現実には起こり得ない現象を引き起こす。

アルバルゴンサレスの息子たちは、谷に生えた巨大な松と老いぼれたブナの間を通過して帰ってきました。谷底から響いてくる水の音は耳に入りませんでした。彼らが通るのを見て、二匹の狼が顔を覗かせましたが、狼たちは怖気づいて逃げてゆきました。二人は川を渡ろうとしましたが、川は流れる道筋を変えたため、足を濡らさずにそこを通りました。村に戻ったときにはすっかり夜になっているよう、森の中を歩いてゆくと、松も岩もシダも、まるで殺人犯から逃れるように至るところで道を空けてくれました。ふたたび泉のほとりを通ると、昔の物語を語っていた泉は二人が通っている間は黙りこみ、遠ざかるのを待って、また物語を続けました (párr. 54)。

後述するように、「谷底から響いてくる水の音」は、長篇詩では兄弟の罪を告発する役を果たしている。その水の音が、こちらの二人の耳には届かない。そして二人の凶悪で恐ろしい様子は、獷猛な狼を怯えさせるだけでなく、感情を持つはずのない川や松や岩にさえも恐怖心を引き起こし、逃げるように仕向けるほどのものなのだ。語り手は、兄弟のことを二度にわたり「^{マロス・イ・ホス}悪しき息子」(párrs. 51, 55) と呼び、四度までも「^{マルバードス}悪党」(párrs. 59, 79, 94, 95) と呼んでいる。

同じアルバルゴンサレスの二人の兄弟は、長篇詩ではどう描かれているだろうか？ 父親を殺害した翌年のある日、家畜を買いに出かけた兄弟はラバに乗って山道をたどる（「また別の日々」の部）。急がないと森の中で夜を迎える羽目になることに気づいた彼らは、「山の中でのある日の午後を／思い出して怖じ気をふるう」(vv. 225-226)。続く箇所では、周囲に広がる松の森が事細かく描写される。「川の両岸には／松の森が成長し、高くそびえ、／谷の幅が狭まるにつれて／岩は荒々しさを増す。／森の頑強な松は／巨大な梢をもち、／むき出しの根で／岩石と繋がれている。／幹が銀色で、／茂った葉が青みを帯びているのは／若い松。年老いた松は、／白く残る病の痕、／白髪^{あと}の苔やキノコ類によって／太い幹を取り巻かれている。／松は谷を覆い、両側の斜面からあふれ出て／視界から消える」(vv. 235-250)。兄弟はさらに、「進むにつれて／樹齢数百年の森が／より深くなり、／山の岩々が地平線を閉ざすのを／目にする」(vv. 270-274)。ここに描かれているのは、短篇小説におけるのとは正反対の様相を呈する自然である。兄弟の接近におののき、逃げ出すどころか、彼らの前に立ちふさがって行く手を阻もうとする自然。荒々しい岩、鬱蒼と茂る松、岩を噛むむき出しの根、病に冒された幹といった光景に恐怖を抱くのは、兄弟の方である。そして自然の姿が兄弟の目に恐ろしいものに映るのは、

大罪を犯した報いを恐れる心理が彼らの中にあるからに他ならない。帰りには〈黒い湖〉の方の近道を通ろうと次男が提案すると、長男は「ひどい土地だ、道はもっとひどい。／誓って言うが、／あそこはもう二度と見たくない」(vv. 261-263)と答えて提案に応じない。

兄弟の農地で何年もの不作が続いた後のある冬の夜、二人は消えかかった暖炉の火を見つめながら、「思いは同じひとつの記憶に／囚われている」(vv. 305-306)。長男が「荒いため息をついて／沈黙を破り、／『弟よ、何てことをしでかしたんだ、俺たちは!』と叫ぶ」(vv. 318-320)。そののち「沈黙が戻り」(v. 325)、やがて次男は言う、「兄さん、／昔のことは忘れよう！」(vv. 329-330)。兄弟の短い言葉の前後に横たわる長い沈黙は、取り返しのつかない過ちを犯した悔悟の念と苦悩を雄弁に物語る。この暖炉の場面も、家畜を買いに出て森に入る挿話も、短篇小説には存在しない。長篇詩を書いた際にマチャードがこれらを追加したのは、兄弟の罪の意識を浮き彫りにするためであったに違いない。

また別の冬の夜、アルバルゴンサレス家の戸口のノッカーが打ち鳴らされる。新大陸に渡っていた弟のミゲルが帰って来たのだが、ノッカーの音を聞くと二人の兄たちは、「恐怖と驚きに満ちて／目を上げた」(vv. 347-348)。この反応は、二人が凶行の報いを恐れて絶えず戦々恐々として生きていることを証拠立てる⁸⁾。

アルバルゴンサレスの長男と次男は、死を遂げることになる日の早朝、家を出て〈黒い湖〉に向かう。何が目的でそこに向かったのかは明らかにされず、まるで不可思議な力によって吸い寄せられたかのようである。日も暮れる頃、兄弟は岩々の間にブナや松の老木が茂る森を通る。そこで目撃するのはまたもや、恐ろしい姿を見せる自然である。

ここにはあくびをする口や、	aquí bocas que bostezan
凶暴な爪をもつ怪物。	o monstruos de fieras garras;
あそこには不格好なこぶ、	allí una informe joroba,
向こうにはグロテスクな太鼓腹、	allá una grotesca panza,
野獣の獐猛な鼻づら、	torvos hocicos de fieras
欠けた歯のある歯並び、	y dentaduras melladas,
岩また岩、幹また幹、	rocas y rocas, y troncos
枝また枝。	y troncos, ramas y ramas.
溪谷の底には	En el hondón del barranco
夜と恐怖と水 (vv. 677-686)。	la noche, el miedo y el agua.

家畜を買いに出かけたときに目にした森は、兄弟に恐怖を抱かせたとはいえまだ本来の姿を保ち、岩は岩、松は松のままであった。今回の描写の前半では、自然の事物は怪物に化けたり、こぶや太鼓腹に化けたり、全く別の姿に変身している。極度の恐怖ゆえ

に二人が錯乱状態に陥り、実際には存在しないものの幻影を森の中に見たのは明らかだろう。ときに表現主義的と評されることもある、悪夢の情景のような描写である (Phillips 1955: 142)。森の描写はさらにこう続く。「一匹の狼が姿を現した。その目は／二つの燐のように光っている。／夜であった。湿って暗い、／闇に閉ざされた夜。／二人の兄弟は／引き返そうとした。密林が吠え声を上げ、／百の凶暴な目が背後の密林で／らんらんと輝いていた」(vv. 687-694)。森は殺気立った野獣の群れと化し、兄弟を取り囲んで彼らが帰るのを許さない。短篇小説に登場する動物は、ここでも長篇詩とは反対の行動を取っている。兄弟が〈黒い湖〉に向かう途中で、「二匹の狼が彼らを見るために顔を覗かせましたが、恐れをなして逃げて行きました」(párr. 101)と短篇にはある。

以上の検討から、長篇詩におけるアルバルゴンサレスの長男と次男は、父親を殺した罪に深く苦しみ、その罰がいつ下るかとかえ続ける人物であることが明瞭になった。先行研究を検討した前節で述べたように、フィリップスは彼らが末弟を殺すことがなかった理由を芸術上の観点から説明していた。マチャードが殺人事件を一件に絞ったのは、「物語の焦点がぼけてしま」うのを避け、緊迫感を高めるための方策であった。この点に関しては、アーサー・テリーも同じ意見である。「第二の殺人の削除は、プロットを単純化するだけでなく、単一の犯罪からどんな返報が生じるかという点に関心を集中させる」(Terry 1973: 44)。しかし末弟が殺されない理由は、芸術上の観点をもち出すまでもなく、作中人物の性格によって説明がつく。二人の兄は父親殺しを心底後悔していたから、第二の殺人を犯そうなどと夢にも思わなかったのだ。

ここで二人の兄たちについて、他の研究者がどんな見方を示しているかを確認しておこう。まずフィリップスによれば、「後悔の瞬間はいくらかあるものの、際立っているのは殺人犯たちの凶暴さである。彼らの強欲と憎悪がどちらの作品をも支配しているように見える」(Phillips 1955: 139)。これは短篇小説と長篇詩の兄たちの間に差異を認めず、どちらにも邪悪な本性を見て取る立場である。マヌエル・トゥニョン・デ・ララもまた、長篇詩の兄たちが見せる「束の間の悔悟」に言及する (Tuñón de Lara 1975: 81)。ベルナルド・ヒコバーテは、次のように後悔や恐怖の念の方を強調するが、両方の作品の兄たちと一緒に扱っている点はフィリップスと同様である。「どちらの作品でも罪人たちが受ける罰は、部分的にはみずからの後悔の念の結果、あるいは少なくとも、父親の亡霊として姿を現すみずからの罪が、兄弟たちの病んだ意識に生み出す恐怖の結果である」(Gicovate 1961: 49)。一方、ベルナル・スゼは両作の兄たちを区別し、「散文の作品はロマンセよりも、二人の殺人犯の悪徳をよりはっきり示している」(Sesé 1980: 342)と述べる。的確な指摘であるが、註の中でのひと言の言及に留まっている。アントニオ・バルバガリーヨは、末子に対するアルバルゴンサレスの不当な依怙蟲屑を問題視し、兄たちの恨みに理解を示す。そして長篇詩の兄たちを擁護すべく、彼らが終始働き者であることをいくつもの場面を引いて例証し、短篇小説の兄たちとの違いを際立たせる (Barba-

gallo 2012: 87-101)。しかし、長兄の作った畝の溝が自然に消えてなくなる話や、次兄が耕した畑から血が湧き出す話などは、短篇にも見出されることを忘れてはならない (párrs. 97, 98)。すなわち、短篇の兄たちもそれなりに農作業はしているのだ。

長篇詩だけに現れる要素で、二人の兄弟の罪を告発し続け、心理的に彼らを徐々に追い詰める役割を果たすものがある。それは殺人事件の真相を仄めかしたり、はっきりと告げたりする神秘的な唄 (copla) である。唄が初めて聞かれるのは、先述した、二人が家畜を買いに出かけた日のことだ。ドゥエロ川の上流に向かって進むと、「谷底から／川の音が聞こえ、／ラバの蹄^{ひづめ}が／石を打つ。／ドゥエロ川の向こう岸で／哀れな声が唄を歌う、／『アルバルゴンサレスの土地は／富で満ちるが、／土地を耕した者は／土の下では眠っていない』」(vv. 205-214)⁹⁾。松が密に茂っているところまで来ると、「森の深いところから、／ふたたび唄が聞こえる」(vv. 227-228)。この段階での唄は、正体の定かでない誰かの孤独な声でしかなく、犯罪の真相を遠回しに暗示しているに過ぎない。しかし末弟のミゲルが新大陸から故郷に戻り、そこに腰を据えて農業に精を出す頃になると、唄は人々の間に広まり、その内容も事件の真犯人を特定し、事件の全貌を端的に伝えるものになっている。

もう人々は、起こった犯罪を
物語る唄を歌っている。
「泉のほとりで
彼は殺害された。
何と悪しき死を彼にもたらしたことか、
悪しき息子たちは！
底なしの湖に
死んだ父親は放り込まれた。
土の下で眠ってはいない、
土地を耕した者は」(vv. 427-436)

Ya el pueblo canta una copla
que narra el crimen pasado:
《A la orilla de la fuente
lo asesinaron.
¡Qué mala muerte le dieron
los hijos malos!
En la laguna sin fondo
al padre muerto arrojaron.
No duerme bajo la tierra
el que la tierra ha labrado.》

ミゲルは猟に出かけた折、誰かの歌う唄を耳にし、死んだ父親が松林の間を引きずられて、〈黒い湖〉まで運ばれた事実を悟る (vv. 437-448)。次に引く一節では、唄のさらなる伝播が語られる一方、その歌詞は真犯人を非難する調子を強めている。「今日では、人々が歌う唄は／村から村へと広まる。／『おお、アルバルゴンサレスの家よ、／何と悪しき日々がお前を待ち受けることか。／人殺しの家よ、／お前の扉を叩く者など誰ひとりいませんように！』」(vv. 517-522)。一家の長男フアンの畑に雑草が生い茂り、なかなか鍬が入らない状況に関しては、こんな唄が歌われる。「人殺しが土地を耕すとき、／その仕事は辛いものになる。／地面^{うね}に畝ができる前に、／顔に皺が寄るだろう」(vv. 599-

602)。¹⁰⁾

さまざまに歌詞を替えながら人から人へと歌い継がれて広まり、犯罪を暴いて糾弾する唄。この唄を歌い出したのは、一体誰なのか？ それは恐らく、兄弟の凶行の一部始終を見届けた泉の水であろう。事実、アルバルゴンサレスを刺し殺した兄弟がブナの林の方に逃げてゆく間、「澄んだ水は流れながら、／野辺のお手柄を物語る」(vv. 127-128)とある。水はその後も事件の真相を告発し続ける。兄弟が家畜を買いに出かけた日にも、川の近くを通ると、「水は飛びはねながら進み、／こんなふうにごうか、物語るように見える。／『アルバルゴンサレスの土地は／富で満ちるが、／土地を耕した者は／土の下では眠っていない』」(vv. 275-280)。さらに、兄弟が〈黒い湖〉に落ちて死ぬことになる日にも、父親を殺した泉のほとりを通ると、「野を流れる水は、／単調な声でごう言う。／私はその犯罪を知っている。／人生にも似た水の近くの犯罪ではなかったか？」(vv. 641-644)。

結び

本稿では、スペイン詩人アントニオ・マチャードが著した二つの《アルバルゴンサレスの土地》、短篇小説と長篇詩を比較検討し、従来あまり力説されてこなかった、作中の人々の人物像における相違点について議論した。作中人物の中で、アルバルゴンサレスとその末子ミゲルは立派な人物として肯定的に描かれ、長男ファンと次男マルティン、ならびにその妻たちは悪役を担っている。その点はどちらの作品でも同様であるが、短篇小説では尊敬すべき人物の優れた側面、邪悪な人物の否定的な側面がそれぞれ強調されている。ことに主人公である長男と次男は、父殺しの大罪を悔いることもなく新たな犯罪を重ねる極悪人、賭け事や酒に財産のすべてをつぎ込んでしまう無分別な人物として提示される。対して長篇詩における同じ長男と次男は、犯した罪の重圧に苦しみ、その報いを恐れて戦々恐々として生きる人物として描出されている。どこからともなく生まれ、民衆の間に広まった唄は二人を次第に追い詰めてゆく。

短篇小説とほぼ同じ筋書きの作品を今度は長篇詩の形で書くに当たって、マチャードはなぜ作中人物のあり方にこのような変更を加えたのだろうか？ 本稿の冒頭で触れたように、当時の詩人は、「人間にまつわる永遠のもの」や「人間に関する基本的なもの」から詩はつくるべきだと考えていた。ならば詩の中心となる人物は、ある程度の普遍性を具え、読者の共感を得られるような存在でなければ都合が悪いだろう。短篇小説の二人の兄弟は、悪徳一色に彩られた平板で一面的な人物である。そこで詩人は長篇詩では、父親を平然と刺し殺す残酷さを持ちながら、同時に良心の呵責に苦しみ、天罰が下る恐怖におびえるような人物、より人間的な陰影に富んだ人物を創造したのではないか。こうした人物像の複雑さはひとつの理由でしかないが、長篇詩《土地》の方が短篇小説より

もはるかに優れているように私には思える。

アルバルゴンサレスの長男と次男が犯した父親殺しは、カインに始まり、その後無限に反復される行為、近親者を殺害する行為を象徴的に表している。だから、二人の犯罪を告発する泉の水は、同時に「千回も紡がれ、／なお千回もくり返されるべき／古い物語を／語っているように響く」(vv. 637-640) のだ。そして二人を飲み込んだ〈黒い湖〉の水は、「永遠のものを映し」(v. 706)、「その懐に星々を宿す」(vv. 707-708) のだ。詩人のペドロ・サリーナスは、長篇詩《土地》の究極的な意味を次のように説明する。「マチャードがこの人間絵巻で表そうとしたのは、絶えず起こっている永遠の惨事であるが、それは流血の惨事ではなく魂の惨事である。ここにあるのは、自分をつくってくれた存在を殺すことで、相応の罰として自分を破壊する人間の姿であり、また、私たちは殺人を犯すと、遅かれ早かれ私たち自身を殺すことになるという発想である」(Salinas 1961: 326-327)。

註

- 1) この短篇小説は、ヘレン・F・グラント (Grant 1953) によって発掘・紹介されるまで、事実上知られていなかった (Sánchez Barbudo 1981: 208)。
- 2) マチャードの作品からの引用は、すべて Machado (1989) より行う。短篇小説《アルバルゴンサレスの土地》(同書の 760 ページから 772 ページに収録) からの引用については、後に段落の番号のみを記し、長篇詩《土地》(同書の 517 ページから 542 ページに収録) については、後に詩句の番号のみを記す。なお、文献の同じページからの引用が続く場合には、最後の引用にのみ典拠を示す。引用の日本語訳はすべて拙訳である。
- 3) このあたりには、創世記第 4 章 12 節で神がカインに語った言葉が意識されているのかも知れない。「土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない」(『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1987 年)。
- 4) 点火をめぐる挿話は、あくまでアルバルゴンサレスの見た夢の中の話であり、確かに現実の殺人事件の原因とはなり得ない (Barbagallo 2012: 93)。しかし、短篇小説の語り手の農民が言うように、「悪い夢」が恐怖の感情によって紡がれた「過去の出来事の記憶」(párr. 32) だとするなら、点火をめぐる挿話に類する事件は現実には起こっていたと推察しても差し支えないだろう。
- 5) スゼはまた、アルバルゴンサレスとミゲルが〈火〉を通じて結びついていることを指摘する。ミゲルは三人兄弟の中で唯一薪に火を点すことができた人物であり、アルバルゴンサレスは、雪の降る夜に寒さに震える息子たちに薪(すなわち火)をもたらすからである (Sesé 1980: 323)。
- 6) そもそも長篇詩では、長男と次女の妻たちはきわめて影が薄く、冒頭近くで嫁いできたことが語られた (vv. 29-36) 後は、二組の夫婦が住んでいる部屋を紹介する文脈で、一度言及されるに過ぎない (vv. 473-478)。マチャードはこちらの作では、父親と三人息子の関係に読者の注意を集中させたかったのだろう。
- 7) なるほど長篇詩でも行商人は捕えられ、死刑になるが、そこに二人の兄弟の介入があったとは書かれていない (vv. 147-150)。
- 8) もっとも短篇小説の同様の場面でも、二人の兄弟が「恐怖で震え上がった」(párr. 75) ことは認めなければならない。ここは、彼らが恐怖の感情を見せる例外的な場面である。

- 9) サンチェス・バルブードはこの「哀れな声」について、「むしろ彼らだけが聞き取る、内なる良心の声に思える」(Sánchez Barbudo 1981: 222)と言う。確かにその可能性はあるが、後にミゲルがひとりで猟に出たときにも唄を聞いており、すべての唄を良心の声に帰することはできない。
- 10) スゼは、こうした唄を通じて自分の思いを表明する民衆をギリシア悲劇の合唱隊にたとえる(Sesé 1980: 312)。またテリーは、さまざまに変容するこれらの唄に伝説の形成過程を見て取る(Terry 1973: 48)。ここで興味深いのは、「アルバルゴンサレスの土地は／富で満ちる。／土地を耕した者は死んでいるが、／土に覆われてはいない」(vv. 179-182)という、唄によく似た一節が、唄の登場に先んじて作品の地の文に出ていることだ。むろん虚構のレベルの話ではあるが、唄は《土地》に引用されるに留まらず、作品自体に影響を及ぼし、その本文の一部を構成してさえているのだ。

参考文献

- Barbagallo, Antonio, *España, el paisaje, el tiempo y otros temas en la poesía de Antonio Machado*, Madrid, Visor Libros, 2012 (2ª edición).
- Fernández Ferrer, Antonio, *Campos de Castilla. Antonio Machado*, Barcelona, Laia, 1982.
- Foster, David W., «“La tierra de Alvar González”: Una contribución machadiana al romance español», *Revista Nacional de Caracas*, 166 (1964), pp. 98-110.
- Gicovate, Bernardo, «Reflexiones en torno a “La tierra de Alvar González”», *Hispanófila*, 11 (1961), pp. 47-51.
- Grant, Helen F., «La tierra de Alvar González», *Celtiberia*, 5 (1953), pp. 57-90.
- Machado, Antonio, *Poesía y prosa*, ed. Oreste Macrí y Gaetano Chiappini, 4 vols., Madrid, Espasa-Calpe / Fundación Antonio Machado, 1989.
- Martínez Menchen, Antonio, «La tierra de Alvar González en la poética de Antonio Machado», *Cuadernos Hispanoamericanos*, 304-307, octubre de 1975-enero de 1976, II, pp. 986-1004.
- Phillips, Allen W., «La tierra de Alvar González: verso y prosa», *Nueva Revista de Filología Hispánica*, IX (1955), 129-148.
- Ribbans, Geoffrey, «Introducción» a Antonio Machado, *Campos de Castilla (1907-1917)*, Madrid, Cátedra, 1999 (9ª edición revisada), pp. 13-88.
- Salinas, Pedro, «El romancismo y el siglo XX», en su libro *Ensayos de literatura hispánica (del «Cantar de Mio Cid» a García Lorca)*, Madrid, Aguilar, 1961, pp. 309-341.
- Sánchez Barbudo, Antonio, *Los poemas de Antonio Machado. Los temas. El sentimiento y la expresión*, Barcelona, Lumen, 1981 (4ª edición).
- Sesé, Bernard, *Antonio Machado (1875-1939). El hombre. El poeta. El pensador*, 2 vols., Madrid, Gredos, 1980.
- Terry, Arthur, *Antonio Machado. Campos de Castilla*, London, Tamesis Books, 1973.
- Tuñón de Lara, Manuel, *Antonio Machado, poeta del pueblo*, Barcelona, Nova Terra / Laia, 1975 (2ª edición).